

オーバーロード八本指  
に利用価値を見出せた  
ら・・・

二丁目のバー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オーバーロードに出てくる八本指にも、もしかしたら利用価値が、あったら。六腕達が、もう少し活躍出来たらそんな妄想を書いてみた。

# 目次

接触 思案

4 1



## 思案

黄金の輝き亭の最上位の個室目玉が飛び出る程の宿泊費がかかる一室で、悩める鎧の戦士が一人。

「金がない・・・情報もない・・・」

漆黒の英雄モモンことアインズワールドゴウンは、ナザリックの方針について人知れず悩んでいた。

「セバス達の活動資金そろそろ限界かな・・・」

活動資金を急遽捻出する事態に困惑していたアインズ。

貴族の娘と従者を演じ情報収集を、してもらおう方針を続けていたがここに来て情報収集活動に限界を感じてきていた。

「シャルティアの件もあつたから情報収集も強化しようとした矢先にこれだもんな・・・」

とどのつまりアインズの収入ベースで成り立っていたセバス達の活動を継続するか否か支配者として、決断を迫られていた。

オトリの一面は、もちろん王都での情報からワールドアイテム所要者あるいは、プレ

イヤーが潜伏しているか？セバス達なら挙げられる報告に一抹の期待を寄せていたが、手がかりは以前として得られていない状態だ。

「なんとかして、情報を得たいがしかし・・・これ以上は・・・」

アインズを悩ます問題は、この件にだけでない。

「組織・・・情報収集も出来つつ活動資金も稼げるこの案も行動に移すべきか・・・でもな・・・そんな都合よくあるわけないよな・・・」

リザードマン達とコキュートスの戦いを観戦していた際に出たデミウルゴスの発案アインズとしても無視出来ない所まで来ていた。

「そうだ・・・そろそろまた報告が、上がる頃かいま中断するのは、不味いよな」

「管理職の辛さが、しみる様になってきたな・・・まあ精神は鎮圧されるが」

人間だった頃の記憶を噛み締めつつ再び思案する。

実際の所選択肢は、そこまで多くない王国、帝国、法国これらの中ぐらいついしか候補上がないのだから、しかしアインズにしてみれば、やはりこれらも無理矢理とは、いかない物のアインズの理想を実現するには物足りない存在だった。

王国は、古き都市いい意味でも悪い意味でも取れるが、アインズにしてみれば悪い方に傾いている。

「セバスの報告書だと王と貴族は権力争いに、下の役人の腐敗している。」

骨組みがガタガタの国家に入るリスクが、やはり行動を躊躇してしまおう。

「それと、セバス達の住まいの資金が予想外に膨らんだんだよな・・・」

遠方の大商人の家族という偽装工作の設定状みずばらしい館に住むことが、出来ず、尚且つ借り受け先の建築組合から相場の相場の数倍の金を全額前払いしなければならぬハメになったお陰でアインズの資金難に更に拍車をかけたのだった。

## 接触

「お見事でしたアインズ様」

「何度言わせるなここでは、モモンお前はチームメイトのナーベだ」

何時ものやりとりを、しつつ漆黒の英雄モモンとナーベは帰り道を歩いていた。アインズが、悩んでいる最中組合から呼び出され、アインザックからは雑談に近いような会話を、しながら近況報告に数時間を費やし今にいたる。

本題のバンパイアの噂話を、聞かされたがかなりあやふやな話題になってしまい又雑談に戻ってしまう。結局収穫なし時間だけが、過ぎ去っていたのだった。

「ここまで時間を取らせるとは、さっさと帰ってしまった方が良かったのでは？」

「駄目だ、組合長の関係を悪くすれば、今後我々に来る依頼にも影響しかねん」

「目的達成の為に、引いてはナザリックの利益のためにもな」

「流石は、アインズ様」「何度も……いやいいとにかくナザリック戻ろう」

道中の会話を、しながらアインズは気づく

「つけられているな……しかもかなり長く何者だ……」

この姿の時は、常に人々の視線に晒されているが、自ずと監視する理由も大体が、モ



モンの英知にあやかろうとか、子供を撫でて下さいなど、芸能人やスポーツ選手のような扱いを、受けるのが恒例だった。

（ナーベを解放しろとか色恋沙汰もあつたよな・・・）

しかし、今回の尾行者は気配を意図して、消したり表したりとまるで気づいてくれないか、と信号を送るような行動をしている。

（さてどうするか・・・）

アインズとしては、防衛対策万全を期している状態なのだが、相手に手の内を晒してしまうリスクは、避けたいしかし、コキュートス一件以降プレーヤーらしき情報や存在も分からないままで、相手を殺してしまうのは、避けたいかと言つてレポートや護衛の者達を盾に、撤退するのは情報すら得られない可能性すらある。

（こうなったら前みたい後始末を出来る様に誘導してみるか・・・）

「ナーベ少しばかり剣の稽古がしたい少し付き合つてくれるか」

ナーベは、言葉の意味を理解し無言で頷き足を、城外に足を進めた。

エ・ランテル近くの人の手が、あまり入っていない森林地帯モモンとナーベは、そこにゆつくり向かつていった。

かつてシャルティア討伐に参加したミスリルの冒険者チームを始末した場所へ誘導しようとしていた。

ここならば尾行者の始末も容易でき、またついてこない場合は、深追いせずには体制を立て直して魔法による透視を行い真意を、はつきりさせる。アインズが、知恵を絞りつつ考えた作戦だ。

(そろそろだな・・・)

二人が、森に入り目的の場所まで着いた所でアインズは、行動を起こす。

「そろそろ、出てきたらどうだろう、それともこちらから直接行こうか？」

モモンの声が木々に響き渡り尾行者が、姿をあらわにした。